

いうこと。いうまでもなくこの授業は、学生のみならず担当教師に相当過重な負担をかけることになる。教師の方は、それぞれが自分の専門の研究領域を持っているのだから、高専の、あるいは大学の世間通用の教科書を使って授業をする方が安全なのに決まっている。教育の方はほとんどにして、自分の研究をしたいというのが研究者としての本音なのだ。二つには、専門学科や一般教育の先生方、あるいは事務局の方、そして誰よりも受講生など、周りの人々の理解がなければ不可能だということ。ひとりで実践するには相当の覚悟がいる。三つには、一定の資金が必要だということ。鶴岡高専と富山高専では、図書館に文庫本で（即ち消耗品の扱いで）課題図書は何冊かずつ入れていただいた。

読書指導は理工系大学の「国語国文学」の授業として、意味のあることなのだろうか。今、大学の大きな変革期に差し加かって、学生の表現能力を養成することの必要性がうたわれている。一番直接的な意見として、作文指導を徹底することだということとはよくいわれる。ただ、人間は、「聞いて」「話す」ことから始まり、「読む」ことを覚え、初めて「書く」という高等な言語能力を身につけていくのである。「書く」能力を伸ばすという以前の基礎作業としての「読む」という指導は、これからの情報革命の時代においてもそれなりに必要なことなのでなかろうか。

本学も平成一三年度から半期制になり、「国語国文学」も通年四単位から前期・後期の半期二単位ずつに分けられた。平成一四年度から更に新しくカリキュラムが大幅に改訂され、一般教育の卒業要件単位は大幅に減らされる。学生にとって負担の大きいこの授業の受講生がどの程度あるか、予測はつかない。大学と授業の大きな転換点に立って、自己確認の意味も含めて、総括し、活字化して大方のご批正を仰ぎたいと思った次第である。

注一 昭和五一年度文部省科研費による「図書館の積極的利用を核とする教育方法の実践的研究」プロジェクトの一環として読書指導を授業に採り入れるこ

とになった。筆者の行った読書指導の詳細については故尾崎正男先生により『高専教育』（第二号）（一九七九年二月刊）に「鶴岡高専国語科の読書指導の方法」として報告されている。

なお、棚町方式は、第二次世界大戦後、シカゴ大学が学生の読み書き能力の実力の低下に対して行った全学的な読書指導、所謂「シカゴ・プラン」の延長上にある。また、仄聞するところによると、二〇年ほど前に徳島大学教養部の複数の先生方が、協力して学生の読書指導にあたれたことがあったという。

棚町方式の読書指導については以下のレポートに詳しく報告されている。

棚町知彌『「キュリー夫人伝」より「チボー家の人々」まで』（『国語展望』第二五号 尚学図書 昭四五年五月刊）

棚町知彌「即読書指導という〈国語〉実践の一報告」（『一般教育学会誌』第三巻第二号 通巻第四号 昭五六年一月刊）

棚町知彌「私の選んだ道——その一・二・三（記念誌『博工』未来編より）——」（『工学教育資料』一三七・一四〇・一四二号 昭五三年七月・昭五三年九月・昭五四年一月刊）

白方勝・木坂基「読書指導の教育工学的な新視野——有明工業高等専門学校における読書指導の実践と実態——」（『全日本国語教育学会「国語教育誌」第四巻第二号 通巻第一三三号 昭五〇年一月刊】

田中道雄「読解に連結する読書指導を——棚町方式の発展のために——」（『全日本国語教育学会「国語教育誌」第五巻第一号 通巻第一五集 昭五〇年一月刊】

中村康治・穴山健「即読書指導という現代国語の実践——有明高専「棚町方式」の評価——」（『国語教育誌』第一八集 所収） など

注二 一定のメニューを読まなければ卒業できないという強制的な授業のもとで、授業が終わってから、本は二度と見たくないという学生が少なからずいるということに気がついた。必修から選択教科に切り替えた大きな理由の一つであったことをここに特記しておく。

パーセント、同じく書くことに関しては、五五パーセントである。

読み書きの指導とはいえ、現実的には読む方に力を入れた指導になっているので、書くということについては自信がつかなかったというのはこの授業方法では仕方がないことかもしれない。

なお、この一年間に読んだ本の中で、一番印象に残った本について聞いたところ、シェイクスピアの作品や『モンテクリスト伯爵』など、長期休暇の課題図書に掲げたものが三四名（五七パーセント）、毎月の課題図書に掲げたものが一五名（二五パーセント）である。

五、おわりに、再び、棚町方式読書指導との関連で

鶴岡高専で棚町方式の読書指導に出会い、二年間読書指導に携わった。その後富山高専で二年間、長岡技術科学大学で八年間、富山県立大学で創設期以来一一年間学生に読書させることを授業にとり入れている。その間、鶴岡高専の尾崎先生は脳梗塞で倒れられ、今はない。お見舞いに訪れたとき「あなたのやってくれた読書指導を何とかして根づかせたいと思ったものだから」とおっしゃったことを思い出す。長岡技科大では棚町先生の後を継いで、先生の時は一年間必修だったものを、半年必修にして実施することにした。副学長の斉藤信義先生が実は元鶴岡高専の校長で、鶴岡時代に読書指導の指揮をおとりになった方である。「最近の大学生は本を読まないから、技科大でも読書指導をしてほしい」ということで、長岡に行くことになったものである。しかし、必修という形で工学系大学の三・四年生での指導は無理が多く、必修から選択教科にトーン・ダウンせざるを得なかった。それでも一学年三三〇名前後の学生の内、前期・後期にはそれぞれ二五〇名以上の学生が受講してくれた。しばらくして体調を崩し、長岡には八年いて、生まれ故郷の富山に帰ることになった。大学院をもった四年制の工科系大学が新設されることになって、そこに奉職することになったからである。過去に奉職した学校では、もう授業での読書指導

の形跡はない。

なぜ読書指導が大学の国語（または文学）教育として定着しないのだろうか。読書指導は中学・高校までの指導であって、大学では幼稚な教育方法なのだろうか。そんなことを常に考えながら今までやって来た。

棚町方式は長期休暇中にこなす長篇を含め、二七点の作品を二年間で読む授業である。それを実際には一年でやり遂げたという。それは受講生にとっては勿論、担当の教師にとっても大変なエネルギーを使うことであったろう。読書指導に力を入れれば入るほど、当然ながら学生のエネルギーは専門学科の勉強からこちらにとられることになって、前任校では「教育に夢中になるのいい加減にしてほしい」という専門学科の先生方からの批判が強かった。確かに、本などを読まなくてもそこそこの技術者として生きていけるはずの大学生に、必修として読書指導の授業を強制して良いのかという迷いがあった。必修を外すことになった。もう一つの当初からあったこだわりは、学生が読む読書のメニューが固定されていていいのかということであった。本を読む楽しみを知ってもらうためには、彼らがいま読んでいる本を授業のメニューとして活かしたい。そういう気持ちから、ギチギチの固定メニューに伴う強制感をなくし、学生の自由で主体的な読書を助けようと思ったのである。その結果、棚町方式から見ればうぶん後退したものになったと思う。（注二）

しかし、国語科教育学の中で読書指導ということを位置づけるとするならば、それは国語国文学科の大学院を出た教師であれば誰でも指導できる、そういう方法が確立されなければならないということでないだろうか。棚町方式の読書指導は棚町先生の熱意と才能があって初めてできた方法である。しかし、国語科教育学という観点から見ると、特定の個人でなければできないということではダメなのである。それは学の方法として自立していないということなのではなからうか。大学の国語（または文学）担当の教師であれば誰でもができる方法が確立されなければならないのでなからうか。

鶴岡高専で最初に読書指導を試みたとき、読書指導ができるためには三つの条件がそろわなければならないと思った。一つには担当教師にその気があると

a シェイスクピア	四	b アンナ・カレーニナ	五
c 人間の絆	二	d カラマゾフの兄弟	
e モンテ・クリスト伯	三	f 戦争と人間	一
g 源氏物語	一	h 魅せられたる魂	
i ジャン・クリストフ		j 背教者ユリアヌス	
k 春の戴冠		l チボー家の人々	
m 橋のない川	三	n 晏子	
o 重耳		p 聖書物語	三
q 赤と黒	一一	r 罪と罰	一九

s 自由課題図書

グリーン 三	漱石もの 三	大地の子 二	ホームズ 二
スレイヤーズ	次郎物語	風と共に去りぬ	封神演義 八大伝
指輪物語	焚火の終わりに(宮田輝)	空想科学	甘辛しゃん
推理小説	ヘッセ	ひとたびはボブラにふす	ホラー小説
三国志	坂本龍馬	深夜特急	その男 など 各一

四、学生のアンケート結果

平成二二年度最後の授業の時、出席した受講生による授業評価を取り入れた。そのアンケートの項目に、次の二点を追加した。

- ① この授業を通じて、本を読むということについての自信がついたか。
- ② この授業を通じて、レポートを書くということについての自信がついたか。

それぞれ、3が、ついたともつかないともいえないということ、5段階評価でつけてもらった。1が大変ついた、で、5が却って大変悪かった、である。その結果は以下の通りである。

本を読むということについて。

一年生名 (%)	二年生名 (%)	合計名 (%)	
1 四一	1 二二	1 六二	1
2 一五	2 三七	2 五二	2
3 一五	3 二二	3 三八	3
4 一五	4 一三	4 二八	4
5 〇〇	5 二一	5 二一	5
合計 三九		合計 六〇	

書くことについて。

一年生名 (%)	二年生名 (%)	合計名 (%)	
1 二八	1 一五	1 四三	1
2 二六	2 二七	2 五三	2
3 二六	3 三七	3 六三	3
4 二二	4 一四	4 三六	4
5 一三	5 一〇	5 二三	5
合計 三九		合計 六〇	

一・二年生を通して、程度の差はあれ、本を読むことについて自信がついたと答えたものが受講生の四七パーセント、却って自信をなくしたという学生は一年で一三パーセント、二年では一九パーセントである。

また、レポートを書くことについて自信をつけた学生は一年では二五パーセント、二年では三八パーセント。自信をなくした学生は、一年では七パーセント、二年では二九パーセントにのぼる。

どちらとも言えないという学生は一・二年全体で、読むことに関しては三八

して、数多くの擬似人生体験を経験することはできる。人間とはなにか。生きていくということはどういうことか。死ぬということはどういうことか。人を愛したり憎んだりすることとはどういうことか。それは何も読書によらなくとも、現在では例えばテレビドラマや音楽、絵画など数多くのメディアを通じて学ぶことはできる。また、擬似体験は所詮擬似体験にしか過ぎないのではないかという批判もある。ただ、文学に携わるものとして、彼等に提供できるものは何なのかということなのだ。文学作品を通じて、人間や人生、この世のことを考えるということはいぜんとして有力な手段であろう。

夏と冬のレポートを合わせて、六百字詰め原稿用紙五〇枚（四百字詰め原稿用紙に換算すれば七五枚）を突破した受講生が何人いたか。そういう学生が毎年一人はいて、そういう学生がいる間は決してこの大学に失望すまいと思っていた。それが平成一一年度は四人、平成一二年度は六人にのぼる。ここ二年間でなぜ急増したのかは今後を見続けなければならない。入学してくる学生の偏差値が突然今までよりも高くなったというわけではない。

彼等の平成一二年度の読書のテーマは以下の通りである。

- ① 「シェイクスピア」と『人間の絆』 ② 「シェイクスピア」と『ホームズ』もの ③ 『赤毛のアン』シリーズと『封神演義』 ④ 「シェイクスピア」と『アンナ・カレーニナ』 ⑤ 「シェイクスピア」と『罪と罰』 ⑥ 吉川本『三国志』と『ひとたびはボブラにふす』

この中で『赤毛のアン』と『ひとたびはボブラにふす』は一気に五〇枚にいつており、他は両方合わせて五〇枚というものが多かった。受講生にとつてはどちらか一方で五〇枚を突破する方が負担が軽いはずなのだが、これは平成一二年度の特徴である。またあらずじを追うだけで四〇枚にも達している者も多い。しかしそれでも残りの一〇枚は本人が自分の言葉で書いている文章なのだから、それはそれで高く評価することになっている。またあらずじを追いかけただけのレポートは、感想文としては原初的なものであるかも知れないけれど、課題の図書をしっかりと読み、主題を自分なりに整理して追いかけているとい

うことだから、あながち無意味ともいえないものである。

レポートの枚数ということに関して、今まで一番多かったものは『赤と黒』を読んだ学生の「十九世紀フランス文学におけるイデオロギーと恋愛」というもので、四百字詰めで八四枚を数えた。本人は「引用文が大部分です」といっていたけれど、それでも残りの三〇枚はやはり自分の言葉で書いているのだ。それはそれで評価してやらねばならない。

近代批評文学を確立した小林秀雄は普通の評論家が二〇〇枚書くところを、濃縮して三〇枚で書いたという。二十歳前後の学生にそれを期待しても無理なのである。まず、書けるということ、書くに足るものがあるのかということに焦点を絞っての指導なのである。

【大 作】 夏季休暇

- | | | | |
|-------------|----|-------------|---|
| a アンナ・カレーニナ | 一二 | b 人間の絆 | 九 |
| c シェイクスピア関係 | 三五 | d モンテ・クリスト伯 | 四 |
| e 戦争と人間 | 三 | f 源氏物語 | |
| g ジャン・クリストフ | 三 | h 背教者ユリアヌス | 三 |
| i 春の戴冠 | | j チボー家の人々 | |
| k 橋のない川 | 一 | | |

1 自由課題図書

- | | | | | |
|-------------|-------|--------|------------|--------|
| グリーン 三 | 三国志 | 二 | スレイヤーズ | バンバイヤー |
| 『赤毛のアン』シリーズ | 地球環境論 | 星新一 | 新世界（長野まゆみ） | 有栖川有栖 |
| ヘミングウェイ | 村上龍 | 生きるヒント | | |
| 御法度 | 各一 | | | |

【大 作】 冬期休暇

金閣寺	六	春の雪	三
痴人の愛	三	少将滋幹の母	三
斜陽	三八	青春の蹉跌 ^{さだつ}	一六
虹いくたび	七	山の音	七

3、戦争と思想（六月分）

夜と霧	二	アロン収容所	四
広島ノート	九	ひめゆりの塔	六
新版 悪魔の飽食	三	七三一部隊	一九
深い河	七	ガンジー自伝	三
空海の風景		歎異抄 ^{たんじしやう}	
正法眼蔵随聞記 ^{しょうぼうがんそうずいもんき}		日蓮書簡集	
聖書物語（新約・旧約）			

4、近・現代文学から その2（九月份）

吾輩は猫である	二	三四郎	八
されどわれらが日々	一一	ノルウェイの森	四
二十歳の原点	一一		
『チボー家の人々』の「第1部 灰色のノート」			

夏休みの読書については八五名中三五名までがシェイクスピアの作品を選んでいる。古典として定着した評価を得ているということと、「恋に落ちたシェクスピア」や十九世紀のビクトリア朝に時代設定した「ハムレット」など、数年前に映画で評判の作品が出たことも関係しているよう。

冬休みの読書については『罪と罰』と『赤と黒』が七九名中三〇名を数える。

夏休みに多くの学生が読んだシェイクスピアは四名に過ぎない。本の分厚さでいえば前二者は文庫本で二冊であるから、夏よりも休暇の短い冬休みの読書としては無理なく、適当なものであったかも知れない。またもう一つ顕著な傾向として、課題図書として与えられたものではなく、自分で自由に選び取った本を読んでいるという受講生が多かった。夏の時は一六名だったのに、冬は二七名である。

自由課題図書をどのように考えるかという問題はあろう。推理小説やファンタジーものなど、ものによっては小学校の高学年の生徒が読んでいるようなものの感想を書かせて、大学の文学の正規の授業のレポートとして評価なんかできるのかという批判もある。担当者としてはそれでも良いと思っている。実際に長岡技術科学大学で過去に行った学生との読書のグループ・ミーティングによれば、生まれてから本を一冊も読んだことがない、本どころか漫画すら読んだことがないという学生がいるというのが現在の学生の実態なのである。そういう学生が、たとえばファンタジーものであれ、推理小説であれ、何冊もある分厚い本を読めたという、しかも、自分で自由に選び取った本であるから、楽しんで読めたという、そのことを重視したいのである。

A student is a lamp to be lit, not a bottle to be filled.（学生はいったん火をつけられるとあかあかと燃え続けるランプのようなものであって、水（知識）で満たされるべき壺ではない）という。大学教授であった伊藤整が勤務していた東京工業大学の先生方の研究生生活を眺めながら書いた『氾濫』という小説の中の科白である。年間何十万冊という本が出版される中で、たかだか十冊前後の本を読んだからといってその学生が突如読書家になるわけでもなければ、持っている知識の量が急激にふくらんだということではない。先述したように知識を得るために小説を読ませるわけでもない。本を読むという営みを通して、読書するということの面白さのほんの一片でも体験させることができるならば、その学生は「生涯読書」に足を踏み出すようになるのではないかということなのである。

人間はたった一つの人生しか生きることではできない。しかし、文学作品を通

三、平成一二年度実績

以上述べてきた方法で、受講生の読書の実績はどうであるか。

毎月の読書の傾向として、月を追うに従ってレポートの提出が少なくなってくるのは、授業に対する慣れもある。また、前期は出席をとっていないこともそれに関係しているかも知れない。それもこの授業の眼目が夏休みの読書だということで大目に見ている。

四月のものとしては、『マッハの恐怖』『オッペンハイマー』『裏日本』『日本との出会い』を読んでいる人が一〇名を越えた。『マッハの恐怖』については、出版されて三〇年前後が経つのであるが、去年ニューヨークの貿易センタービルのテロに象徴されるように、航空機によるテロや事故は今でも大きな脅威である。またオッペンハイマーは「原爆の父」といわれる。原爆による戦争の脅威は、二十世紀科学技術の生み出した最大の危機であろう。『裏日本』は明治以降の日本の近代化の過程で、日本海側がどのように置いてけぼりを食うことになったか、表日本と裏日本のひとつの比較文明論になっている。本学が富山県にあるということ、富山県出身者の学生が多いということと無関係ではあるまい。『日本との出会い』は一つの比較文化論として読んでもらえていると思う。いずれも納得できる数である。こちらとしては比較文化学の古典といわれる和辻の『風土』をもっと多くの学生が読んでくれればいいと思っていた。二十歳前後の学生には難しいのかも知れない。

五月のものとしては、『斜陽』と『青春の蹉跌』が一〇名を越えた。太宰は死後五〇年も経つけれど、いぜんとして学生の隠れた愛読書である。前の勤務校では『人間失格』をもらって推薦していた。あまりにも暗い作品だということと一年でメニユから外したけれど、自由課題で『人間失格』を一〇名以上の学生が読んでいた。『青春の蹉跌』は野心家の若者の蹉跌を描くが、今でも映画化されているし、学生にも読まれ続けている。

九月のものからは、『されどわれらが日々』と『二十歳の原点』が一〇名を

越えた。いずれも学生運動がはなやかだった時代の作品である。前者は今の学生には少し難しいようだ。『二十歳の原点』は運動に行き詰まって自殺した私立大学の女性の書いたものである。「孤独であること、そして未熟であること、それが私の原点だ」という言葉には、数多くの学生がこころ打たれ、考えさせられていた。

六月のものでは、予想していたとおり、石井細菌戦部隊を題材にとった『七三部隊』が一〇名を越えている。同系列の『悪魔の飽食』もいれると二〇名を越える。科学技術の犯した犯罪を告発しているわけだが、科学技術の描く未来は必ずしも人類の至福にはつながないという時代の風潮と連動した数字である。一時的に評判になることはあつたとしても、ただ単に告発するだけの作品は、古典としてながく生き残ることはあるまい。人類みずから犯した罪を振り返ることは憂鬱なことなのだから。そういう意味では『夜と霧』をもっと読んでほしいと授業では指導していた。『夜と霧』では、アウシュウィッツに収容されていた著者の実体験が描かれていて、戦争犯罪を告発していると同時に、極限の中でどうやってみずから支えたかが書かれている。生きていくということが孤独で、つらく、苦しいものである以上、この本は人生論の書として読める。それでも二名の学生が読んでくれた。『ひめゆりの塔』は薄さに誘われて読んだ人が多い。平成一三年度からはメニユからは外れている。

1、技術者として（四月分）

小説ガン回廊の朝	三名	ガン回廊の炎	一
マッハの恐怖	一〇	オッペンハイマー	一一
環境倫理学のすすめ	七	裏日本	一九
日本との出会い	一二	風土	五
理科系の作文技術	五		

2、現代文学から その1（五月分）

2、冬季休暇中課題図書

- a シェイクスピア b アンナ・カレーニナ c 人間の絆 (W・モーム)
 d カラマゾフの兄弟 (ドストエフスキー) e モンテ・クリスト伯 (A・デュマ)
 f 戦争と人間 (五味川純平) g 源氏物語 (瀬戸内寂聴・外)
 h 魅せられたる魂 (ロマン・ロラン)
 i ジャン・クリストフ (同) j 背教者ユリアヌス (辻邦生)
 k 春の戴冠 (辻邦生) l チボリー家の人々 (二三冊、ロジェ・マルタン・デュ・ガル、白水社)
 m 橋のない川 (住井すゑ・新潮文庫)
 n 晏子 (宮城谷昌光、新潮文庫) o 重耳 (宮城谷昌光、講談社文庫)
 p 聖書物語 (新約・旧約とも) q 赤と黒 (スタンダール) r 罪と罰 (ドストエフスキー)

s 自由課題図書 (シリーズもの、同じタイトル) q 著者 q テーマであること三冊以上)

iii 感想文を書かせることの是非

感想文を書かなければならないとなったら、かえって学生の読書意欲をそぐのではないか、という疑問はこの手の授業には常についてくる問題である。

以前は、そのことを考えて読書ノートをつけさせていた。読書ノートといっても、書き抜きノートである。こころうたれたところや、気に入ったところ、覚えておきたいところなどを書き抜くのである。それにさらに登場人物の系図を添付させた。小説など、読みっぱなしにすることが多いけれど、読後に人物の系図を作ることによって、もう一度その本の主題を整理することにもなるし、有効な方法であると思う。また、書き抜きは、一応文章を書くことを職業にしている人の文を書き抜くことによって、文の生理を体得してもらうことになっている。細心の注意を払って作られた文をそのまま書き写すことは、一つの

文章修行の方法である。書き抜きの日付を付けていけば、これはそのまま読書日記にもなる。ただ、これとてやはり読みながらどこを書き抜こうかということとで読むことの楽しみがそがれることには違いはない。文章を書いて、小説の主題を考える、あるいは読書という自分なりの小さな人生体験を振り返るといふときは、やはり感想文の方がよいのではないか。

強制的に読まされ、感想文を書くことによるマイナスとして、今まで本を読んでいた学生が、逆に読まなくなるといふこともありうるので、長岡技科大では半年必修だったものを選択教科に切り替えた。長期休暇の課題として自由課題図書を選んだのも強制感をなくすためである。課題図書は当然ながら教師が一通り読んであるものを出してあるが、自由課題図書はいろいろな本が読まれるため、教師の読んでいない本が出てくる可能性が非常に大きい。それはそれで認めることとしている。

また、期末試験はしないことにした。およそ教場で教えたことがどの程度学生に理解されたかを確認する意味で、試験をするということは大切なことなのだが、本をほとんど読ませ、レポートを書いていただくという趣旨から、前期は試験は免除している。

iv 後期の授業と成績評価

後期の授業は他の大学の一般教育でよく行われているように、「国語表現法」のテキストを使い、「話すこと」と「書くこと」について、章を追って解説している。これについてはここで多くを書く必要はないけれど、冬休み中にやはり読書感想文のレポートを課していることから、平成一二年生までは試験は免除している。授業の焦点を冬休みの宿題レポートに絞っているからである。

(なお平成一三年度生からは、冬休みのレポート以外に期末試験を課している) 一年間を通しての成績は、夏と冬のレポート、前期は毎月のレポート、後期は出席点も加味して、前期・後期の成績の平均でつけている。

業で、一〇年経ったら何も残っていないというものも多い中で、夏休みの大作を読むことを通して、どんな分厚い本でも読もうと思えば読めるという自信がついたならば、その自信はこの授業が学生の人生に送ることのできる最高のプレゼントであろう。

同様に、冬休み中にも大作の課題図書を読題として出している。自由に学生の好きなものを読んでも良いのだが、夏休みほど休暇は長くないのだから、冊数は三冊以上という条件である。こちらは、書くかと思えば何枚でも書けるという自信をつけさせることを目的としている。

普通の評論家ならば二〇〇枚もかけて書くところを濃縮して三〇枚に書という小林秀雄のような人もいるだろうけれど、本を読んだりものを書いたりすることが好きであれば、何も工学部に来るはずはないかという学生がほとんどである。多くを期待してはいけない。

書けないという学生には、二つの場合がある。一つには、いろいろ書きたいことがあるけれど、どう書いて良いかわからない。これはまだ救いようがあって、レポートを書く訓練をしていくうちに何とかなる。問題はもう一つの場合で、書くかと思っても、何も書くものがないという場合である。こちらの方が救いようがない。この読書指導は、栄養のある定職メニューをどんどん食べさせて、いわゆる「人間力」をつけていたかどうかというのが大きな目標の一つである。

もとより、年間何十万冊も本が出版される中で、ただか何冊か本を強制的に読ませたからといって、その学生が急に知識が増えたとか、読書家になったとかということではない。多様な情報メディアの存在する現代において、学生が知識を得ることができるのは読書だけというわけではもとよりない。ただ、この読書指導の試みが「生涯読書」の一つのきっかけになれば良いと思っている。学生は知識で満たされるべき壺ではなく、いったん火をつけられればあかあかと燃え続けるランプのようなものなのだから。そして課題図書は小説が多ければ、それは知識を身につけるためのものではないのだから。

夏休みと冬休みの両方のレポートが出ていなければ、履修したことにはなら

ないということになっている。何よりも、分厚い本を読ませるためである。また、ボーナス点として、両方のレポートが六百字詰め原稿用紙で五〇枚を越えた場合は無条件で成績を百点あげるという約束になっている。毎年一人はそういう学生が出るのであるが、平成一一年度は四人、一二年度は六人がその目標を達成している。

文科系だから本が好きだとか、理科系だから本が嫌いだとかということはないのではないだろうか。だいたいシェイクスピアを読んだことのない英文科の学生は数多くいるし、漱石を知らない国文科の学生もいる。そういう中で、工学部で、四冊も五冊もある本を読み、六百字詰め原稿で五〇枚も書いた学生は、本人は思いもしなかった自信をつけたということになるのではなからうか。

平成一二年度に課題として掲げた大作は次に示す通りである。課題図書としてはもっと数多くの本の種類を並べたこともあるのであるが、毎年、メニューを少しずつ変えたいということと、自由課題図書を認めていることもあって、絞った形になっている。

1、夏季休暇中課題図書

- a アンナ・カレーニナ (トルストイ) b 人間の絆 (W・モーム)
c シェイクスピア (以下から4冊、1冊だけではダメ) ① ロミオと
ジュリエット ② マクベス ③ ハムレット ④ オセロー ⑤
リヤ王 d モンテ・クリスト伯 (A・デュマ) e 戦争と人間 (五味川
純平) f 源氏物語 (瀬戸内寂聴・外) g ジャン・クリストフ (ロマ
ン・ロラン) h 背教者ユリアヌス (辻邦生) i 春の戴冠 (辻邦生)
j チボー家の人々 (二三冊、ロジェ・マルタン・デュ・ガル著、白水社)
k 橋のない川 (住井すゑ・新潮文庫)
l 自由課題図書 (シリーズもの、同じタイトル≡著者≡テーマである
こと、五冊以上)

小説ガン回廊の朝（柳田邦男）、ガン回廊の炎（柳田邦男）、マッハの恐怖（柳田邦男）、オッペンハイマー（中沢志保・中公新書）、環境倫理学のすすめ（加藤尚武・丸善ライブラリー）、裏日本（古舘忠夫・岩波新書）、日本との出会い（下ナルド・キーン・中公文庫）、風土（和辻哲郎・岩波）、理科系の作文技術（木下是雄）

2 現代文学から その1（五月分）

金閣寺（三島由紀夫）、春の雪（三島由紀夫）、痴人の愛（谷崎潤一郎）、少将滋幹の母（谷崎潤一郎）、斜陽（太宰治）、青春の蹉跌（石川達三）、虹いくたび（川端康成）、山の音（川端康成）

3 戦争と思想（六月分）

夜と霧（フランク・ミズズ書房）、アーロン収容所（会田雄二・中公文庫）、広島ノート（大江健三郎・岩新）、ひめゆりの塔（石野径一郎・講談社文庫）、新版 悪魔の飽食（森村誠一・角川文庫）、七三一部隊（常石敬一・講談社現代新書）、深い河（遠藤周作）、ガンジー自伝（ガンジー）、空海の風景（司馬）、歎異抄（岩波文庫）、正法眼蔵随聞記（岩波文庫）、日蓮書簡集（岩波文庫）、聖書物語（新約・旧約）

4 近・現代文学から その2（九月分）

吾輩は猫である（夏目漱石）、三四郎（夏目漱石）、されどわれらが日々（柴田翔）、ノルウェイの森（村上春樹）、二十歳の原点（高野悦子・新潮文庫）、『チボー家の人々』の「第1部 灰色のノート」

四月は読書指導の最初ということで、学生がとりつきやすいように「技術者のもの」を中心に、中には『裏日本』『日本との出会い』『風土』など、どの月にも分類の仕様のないものも採り入れている。

五月は、三島や川端、谷崎の作品など戦後のいわゆる純文学として定評のあるものが中心である。九月分はやはり文学作品を扱っているが、それぞれは学生文学として、読む学生たちが自分たちの生活と比較できるような材料が集められている。いろいろな学生群像が小説では書かれているけれど、それと比較して自分たちの学生生活はどうか、という問いかけがある。

六月のものは現代思想や戦争を意識している。彼等が将来社会に出ていくとき、何らかの形で接点のある可能性のあるものを、ひとつのものの見方に偏らないように公正に並べたつもりだが、文学の授業として行うわけだから、それなりの限界はあると思う。戦争については、八月一五日の終戦の日を迎えるに当たって、戦争について考える材料を提供するという位置づけである。これについても題材の性質上戦争の悲惨さを書いたものが多いけれど、一つの国家の弁護にならないように、政治的に偏向したものにならないように気を遣った。『アーロン収容所』などは一つの比較文明論としても読めるし、『夜と霧』は生存の極限状態の中で、どうやって自分を支えたかという一つの人生論としても読める。もちろん学生がどうという読み方をしようとも、それは学生の自由である。

ii 長期休暇中の読書

夏休みの読書については、課題図書としていくつか書名を掲げているが、課題図書以外にいま読みたい本があるならば、いくつか条件を満たしていればそれでも良いとしている。条件というのは、同一のタイトルであるか、同一の著者であるか、同一のテーマであるか、いずれにせよ感想文として書いたときに、主題が分裂しないようにということである。

またもう一つの条件は、冊数が五冊以上であることである。多くの大学の授

理工科系大学における国語教育

—— 本学における実践的読書指導 ——

工学部一般教育等 中 哲裕

一、 棚町方式読書指導との出会い

廊下を歩く学生のジューパンのポケットに、授業を受けている学生のカバンの中に文庫本が入っている。テニスの順番を待ってベンチに腰掛けて本を読んでいる学生がいる。表玄関の噴水の前で本を読みながら友達を待っている学生がいる。工学部とはいえ、それが自分の勤める大学のキャンパスでは当たり前の風景である。そしてそのことに教師としての自分の人生の何分の一かがかわることができたならばと思う。そういうささやかな夢を見ることは、文学に携わる教師として許されても良いのではないだろうか。

鶴岡高専に勤めてから、いわゆる文部省の検定教科書に飽き足りなく思っていた私に、すぐ読書指導の話が舞い込んだ。有明高専に棚町先生という方がいらつしゃって、学生にどんな本を読ませておられるから、有明に行つて授業の実際を見てきなさいというのである。ただ、長距離出張をすれば必ず体調を崩すという虚弱体質の私にとって、山形県の片田舎から九州まで行くのはあまりに遠い。「こちらから行かなければならないようではダメなんですよ。向こうからおいでいただくくらいでなくっちゃ」などと逃げ回っていたら、本当に棚町先生が鶴岡においでになることになって、逃げる事ができなくなつてしまった(注一)。この読書指導は棚町方式読書指導の影響下に生まれたものである。

二、 その方法

1 毎月の課題図書

最初の授業の時に、授業のあらましについて説明する。

前期は四月・五月・六月・九月に、それぞれ選定図書の中から一冊を読み読書の感想文を提出してもらう。夏休みには超大作を読んでもらう。授業ではそれぞれその月の課題図書の解説を行う。授業では出席はとらず、毎月提出されるレポートを出席点とする。なお第二回目の授業の時に原稿の書き方の説明をする。原稿は六百字詰め、横書きである。レポートは赤のボールペンで直して、返却してやり、レポートの書き方についての基礎的なものを身につけさせる。それ以後の授業については、課題図書のガイダンスとして、毎回簡単な解説を試みている。それも話者のあくまでも一つの読み方であつて、解説や他人の読みに引きずられることなく、どんなに原初的なものであつても自分がどう思ったかが一番大切なことから、それを大切にするようにいつている。

課題図書に関しては次に掲げる通りである。

1 技術者として(四月分)